

現代の「ハレ」の精神とは。

海外で育まれた服装のルールに「ドレスコード」がありますが、日本には「ハレの日」という概念とともに、晴れ着のような特有の服飾文化とマナーが存在しています。では、「ハレ」と「ケ」の捉え方が変化しつつある現代において私たちはどのように意識するべきでしょうか。服飾史家の中野香織さんと「ハレ」に応じたバッグの選び方を考えます。

変容する「ハレ」と「ケ」。
バッグが担う役割とは
文・中野香織（服飾史家）

日本の伝統的な世界観に「ハレとケ」がある。かつて「ハレ」は、冠婚葬祭や年中行事などの非日常的な特別な日を指し、「ケ」はそれ以外の普段の生活を表した。「ハレ」の機会には特別なご馳走を食べ、普段着と区別された「晴れ着」を着た。この世界観を見出したのは、民俗学者の柳田國男である。何世代も前から続く「ハレとケ」の区別が、明治の近代化が進むなかで曖昧になっていくということも柳田は指摘していた。その後、1970年代に民俗学者や文化人類学者の間に新たな議論が巻き起こり、「ハレとケ」のとりえ方も多様になった。

さらに半世紀、時代も大きく変化した。従来は「ハレ」のカテゴリーに入っていた飲食や装いは、現代では日常となり、その点では毎日が「ハレ」になった。いや、年がら年中あちこちでパーティやフェスがおこなわれている状況こそが「ケ」になったのか。両者の明確な線引きがますます難しくなるなかで、人生の時間が「ハレ」と「ケ」に区分されるという世界観に対する意識も薄らいでいる。だからこそ、いまいちど「ハレとケ」の意義を考え直し、新しい解釈を与えるべき時が来ている。そもそも、「ハレ」と「ケ」を分けることにはどんな意味があったのだろうか？

「ケ」は生活のリズムを作る。規則正しい生活は、心の平穏をもたらす。ただ、これが延々と続くとマンネリ感、ひいては意欲の低下をもたらす。日常を超える経験がないと、人は停滞するのだ。日常生活を営むためのエネルギーが枯渇することは「ケガレ（気枯れ）」とも呼ばれた。枯れた氣に潤いを注ぐのが、「ハレ」であつた。非日常のイベントが高揚感を与え、生活に張りりと彩りをもたらし、リセットの機会を与える。とはいえ、これも延々と続くとエネルギーを消耗させ、感覚も麻痺させる。

つまり、大切なことは、「ハレ」と「ケ」をきちんと分けて、循環させることにあつたのだ。人間の健康と幸福感にとって、両者の循環が不可欠なのである。社会的な側面から見ても、「ハレ」と「ケ」の循環が果たした役割は大きい。「ケ」における日常的な協力が家族やコミュニティの信頼感を深める。一方「ハレ」の時には、成員の意外な一面を知り、共同体の一体感を高める。その循環があつて、社会との絆が築かれていった。そんな「ハレ」と「ケ」がもつ力の本質を理解して、現代の目で「ハレ」を見直してみたい。

都市化・グローバル化が進むとともに「ハレ」は多様になり細分化した。複雑になった「ハレ」を分類するにあたり、西洋のドレスコードの知恵を借りてみよう。フォーマル、セミフォーマル、インフォーマルという3分類である。この基準にな

らい、現代における「ハレ」を3段階に分けてみる。人生の晴れ舞台を彩る「寿ぎ」のハレ、優雅な社交の時間を楽しむ「エレガンス」を装うハレ、そしていつもより少しだけおしやれをして「最上の日常」を楽しむハレ、というように。

西洋のドレスコードとの間に、決定的な違いはある。ドレスコードにおいてはそれを。指示するホスト。がいて、基本的要件に従うことが前提になる。一方、ここで私たちが考えたい「ハレ」の3段階においては、約束事が時にはあるかもしれないが、それよりはむしろ、個人の主体性。が尊重される。「ハレ」における3段階の差異を自覚し、演出するのだ。服や靴がなんでもありになった時代において、各段階の「ハレ」感の違いをもっとも象徴的に表現できるのが、ほかならぬバッグである。「寿ぎ」にはジュエリーと同格に扱えるバッグ、「エレガンス」にはクラシックを進化させた格式のあるバッグ、そして「最上の日常」には技を加えたファッショニステのハイバッグ、というように。それぞれの「ハレ」に臨む姿勢の象徴となるようなバッグを携えるのである。

こうして時間にメリハリを創り、丁寧に向き合うことは、感性と創造性を刺激し、私たちが停滞から救ってくれるだけではない。時間を共有する人やコミュニティとの結びつきをより新鮮な形で深めてくれるだろう。新しい未来が生まれるのは、まさにそこからだ。

なかのかわり●イギリス文化、ダンディズム史、ファッション史、ラグジュアリー領域を専門とする独立研究者として執筆・講演を行う。著書に『インベーター』で読むアパレル全史、共著『新・ラグジュアリー文化が生み出す経済10の講義』、監修書『時代を変えたミニの女王マリー・クワント』など多数。ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを歴任する。